短編（少年陰陽師二次創作）

高瀬郁乃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
短編（少年陰陽師二次創作）

【Ｎコード】
Ｎ９７３９Ｓ

【作者名】
高瀬郁乃

【あらすじ】
昌浩×彰子がメインの短編集ですｖ

一日一潰れ（前書き）

昌浩ともっくんの夜警での一幕。
以前、『もっくん同盟』さまの方に投稿させていただきました。
『少年陰陽師』の初作品になります。

一日一潰れ

「晴明の孫～っ。」
そう言って、今日も今日とて、昌浩の『自主夜警』の帰宅に標準をあわせたように、多くの妖が彼の上に振ってきた。俗に言う『一日一潰れ』である。
もちろん、物の怪はそれを察知し逃れている。
しかし妖の標的たる彼にはそれは叶わず、毎度のように妖の下敷きになる。何しろ、一度逃れても第2陣・第3陣と控えているのだ。逃れられるわけはない。
「よぉ、今日も元気か？」
「にぶいのぉ・・・。」
などなど、それぞれ口々にまくし立てる。
「半人前だけど、一応陰陽師のくせになぁ・・・。」
そう言ってから全員で合唱する。
「「「「「「晴明の孫や・・・」」」」」」
いつものごとくそう締めくくられる。
「――――孫って言うな～！！」
昌浩は身体を起こしつつ、そう叫んだ。その拍子に昌浩の身体に乗っていた妖たちがぱたぱたと地面に落っこちた。
「だってな、孫だしな。」
そう返事をしたのは、身体がかえるに似た妖、である。
しつこく述べる妖に、昌浩はぎんっとにらみを利かせるのだが、そんなのはちっとも怖くないように飄々としている。
「じゃ、な～っ。晴明の孫～！！」
妖はそう告げると、方々に去っていった。なんと気ままな生き物だろう。たまにそう思うこともある昌浩だった。
それを半ばおもしろそうに傍観している物の怪の首根っこを昌浩はむんずっと掴んで、自分の目の前にぶら下げた。

「――もっくん・・・。逃げたね。」
「いや～、せっかくのコミュニケーションを邪魔しちゃ悪いだろうが。」
しれっと応える物の怪に、昌浩は噛み付いた。
「コミュニケーションじゃない！！」
だがその怒りに、物の怪は恐れ入った様子もなくしれっとしている。
「そんなことより、そろそろ帰ろうぜ。きっと彰子が待ってるぞ、晴明の孫。」
「孫言うな！！」
とっさにそう返したものの物の怪の言は大いに頷けたので、昌浩は物の怪の身体をひょいと持ち上げて自分の肩に乗せる。
――彰子。藤原彰子。大貴族の左大臣『藤原道長』の長女である。とある事情で昌浩の祖父、安倍晴明の下に半永久的に預けられた女性だ。
彼女は毎晩夜警に出る昌浩を見送り、彼の説得にもかかわらず、夜遅くまで起きていて、昌浩の帰りを待っているのだ。

今日もきっと昌浩の帰りを待っているだろう彰子のために、昌浩は早めに屋敷に戻る。二人のそんなほほえましい様子を物の怪は嬉しそうに見守っているのだった。

はじめての喧嘩（前書き）

彰子と昌浩の初めての喧嘩。　その原因とは？

はじめての喧嘩

「もう、昌浩なんて大っ嫌い！！」
そう彰子に言われたのは、今から半刻ほど前。原因は些細なことだった。
曰く、
「昌浩ってば、最近ちゃんと私の顔を見て話をしてくれない。」
とのこと。
もう物の怪などから見たら、『ただの痴話げんか』に類するものと即座に判断するだろう。現に物の怪は二人のことはそっちのけで、部屋の隅で身体を丸くして横になっているのだ。
「ごめん、ってば、彰子。」
そう謝るのだが、視線を彰子に合わせずに言っているものだから、火に油を注ぐようなものだ。
「ほら、ちゃんと私を見てないじゃない！！」
彰子の瞳がまっすぐと昌浩を射抜く。
「そんな事・・・。」
「ほら、今も！！」
昌浩が何か言うたびに、彰子はどんどん指摘していく。

――――実際、昌浩は彰子を直視できないのだから仕方わなぁ…。
部屋の隅で、二人の会話を聞いてた物の怪はそんな感想を持つ。

「ねぇ、昌浩。――――私、何かした？」
「え？」
「さっきから昌浩、私のことちゃんと見てくれないでしょ？」
「そ、それは…。」
もごもごと言い訳を考える昌浩に、彰子は毅然と言い返す。
「『それは…』何？」

いつもよりも興奮しているせいか、彰子の頬がほんのり赤みを増す。
「ねぇ、言ってよ？」
もうこれ以上そらされるわけには行かないと言うように、彰子の両手が昌浩の頬をがっちりと掴み、自分の方へと向ける。
そうすると、昌浩の視線は逃げ場を失い、まっすぐと彰子に向けるしかないのである。
「何でもないよ、本当に！！」
そう言い切る昌浩の頬が、これ以上ないくらい赤らんだ。
———まぁ、言えんわな、『彰子のことを意識してます』だなんて…。
物の怪はその理由を知っているが、あえてそのことを彰子に伝えようとはせず、もう少しこの騒ぎを傍観することにする。
なんといっても痴話げんかは「犬も食わない」というもんな。
所詮、物の怪にとって二人の喧嘩は他人事なのである。

記念日（前書き）

あれから丸一年・・・。
そんな大切な記念日とは？

記念日

「もう一年かぁ。」
昌浩はいつもの如く暦を写しつつそう呟いた。
「あ？」
そう返事をしたのは物の怪だがよほどの霊力がない限り独り言を言っているようにしか見えないため、昌浩の返答も自ずと小さくなる。
「いや、元服して一年だなぁと思ってさ。」
「まぁなぁ、まだ元服した日まで時間はあるけどな。」
とそこまで応えた物の怪だがとあることに気がついてにやりと笑って見せた。
その笑いときたらかなり含みのある笑みで隣にいる昌浩はこの上もなく居心地が悪い。
「なっ、何？」
「いやぁ～、確かに今日でちょうど丸一年だなぁっと思ってだなぁ～。」
「――何がだよ？」
やや慌てたように問い掛ける昌浩に物の怪は意地悪く笑って見せた。
「あ、それ俺に言わせるの？」
「その答え、絶対に間違えてるよ。もっくん」
「いやいや、俺様の記憶力を侮るなよ」
「なにお～っ」
そう言って物の怪を睨み返した昌浩の背後からとある声が降ってきた。
「何をぶつぶつ言ってるんだ、昌浩殿。」
やや剣のあるその声に振り返れば、ちゃっかり敏次が立って昌浩を睨んでいる。
「敏次殿？！」
「『敏次殿』じゃないだろう？ちゃんと手元を見て仕事をしてるの

か？君は？！」
呆れたようにそう告げる敏次の視線を追って自分の手元を見た昌浩は、そぞろに動かしていた筆がぽたぽたと今まで昌浩が書き上げてきた暦の上に大きな泉を作っているを発見した。
「あ゛〜っ」
「『あ゛〜っ』じゃないぞ、昌浩殿。君はもう少し落ち着いて仕事をするように。」
そんな言葉がため息とともに昌浩の頭上から降り注いだ。だが、余りにもショックすぎて昌浩の頭にほとんどそんな言葉は入ってこない。
「とりあえず、書き直しておくように。」
そう告げると、敏次はその場を後にする。
「また書き直しだよ・・・。」
そう恨みがましい目つきで物の怪を睨みつけるものの、物の怪はどこ吹く風で取り合わない。
「まぁまぁ。そんなことより、今日の帰りに市に寄っていくだろ？」
その物の怪の問いにしっかりと頷いて、昌浩は新しい紙に再び暦を書き付けていく。

（彰子と出会って今日丸一年って訳か・・・。）
真剣に暦を書き写している昌浩の横で物の怪は考え深げに昌浩を見つめる。
こうやって出会えた記念日を大切に祝う昌浩と彰子の横にいつまでも自分の居場所があり続ければいいのだけどと、そんなことを物の怪が考えていることなど、暦書きに一生懸命な昌浩は思いもしなかったりする。

今日は何の日？（前書き）

あれから丸一年・・・。
『記念日』の彰子バージョンだったり、します。

今日は何の日？

「もう一年になるのね。」
昼。
昌浩の部屋で彼の脱ぎ散らかしたままの狩衣をたたむ手をふと止めてそう呟いた。
「彰子姫。どうかされたのですか？」
彰子の行動を傍でほほえましく見ていた天一がいぶかしげに尋ねてくる。
「え？あ、ううん。なんでもない。」
そう応える彰子にだった。
そしてそのまま彰子の心は、初めて昌浩にあった頃に思いを馳せた。

まだ昌浩は元服前だったし、彰子のほうも裳着をまだ済ませていなかったのだ。
（まだまだ子供だったのよ、ね）
あの時はそうは思わなかったけれど、一年たった今になって振り返るとそんな気がしてくる。
『えっ、きみ、これが見えるの？』
そう問いかけられた言葉はそう昔ではない。あの時の声色だってちゃんと覚えている。
だってまだたった一年しかたっていないのだ
だが、一年前には考えられなかったところに今彰子は存在している。
とある事情で実家には居れなくなりこの安倍邸へやってきたのだ。
大好きだった父母と二度と会うことはかなわなくなったが、その代わり何よりも大切な人のそばに居れるようになった。
まさに激動の一年だったと言ってもいいだろう。
そしてその何もかもが、丁度一年前の今日に起因しているのだ。

「一年たったんだよ。」
覚えてくれている？
そう昌浩に今日問いかけてみようか？
そんな埒もないことを考えてしまう。
（覚えてくれてないかな？）
男の人はそんなこと覚えていないことが多いのだと、実家の母が言っていたことを思い出す。
（だけど、昌浩なら覚えてくれているかも・・・。）
一方でそんな期待を持ってしまうのもまた事実だ。
可能性としては５０ｖｓ５０。
「うん、決めた。」
彰子はそう呟いて顔を上げる。
覚えてくれていないと思うけど、もしかしたら覚えてくれているかもしれない。
だから、それとなく昌浩に尋ねてみよう。
「今日は何の日？」
ってね。
それで覚えてくれていたらすごく嬉しいけど、覚えてくれてなくても失望はしないだろう。
そう心に決めた彰子の耳に、元気に帰宅した昌浩の声が、聞こえた。

陰陽師

真夜中。
ふと目を覚ますと自分の横で安らかな寝息をたてている気配がする。
「昌浩…。」
彰子は自分を抱きしめたまま寝入っている夫の頬に、その白い手をそっと這わせる。
夜中に目を覚ましたとき、その大半は夫が不在なので、いつも寂しく思っていた。
（陰陽師だもの。仕方ないよね。）
そう何度言い聞かせただろう。
もし昌浩が陰陽師でも何でもなければ、彼の傍らに今の自分がいなかったであろうことは理解している。
昌浩が陰陽師であったからこそ、出会い結ばれたのだ。
分かってはいる。だが…。
（昌浩が陰陽師じゃなかったらよかったのに・・・。）
時折そう思ってしまうことがある。
そう思うのはわがままなのだろうか。
彼にどれほど才能があろうと、力があろうともそんなことは彰子には関係なかった。
昌浩が昌浩であったからこそ、彰子は彼を好きになったのだ。

いつも、彰子は昌浩の身を按じている。
直丁の頃よりもその地位は上がり、彼は自分の意見を言えるほどまでに上り詰めていった。その努力は誰よりも彰子が一番近くで見ていたのだ。
それは同時に彰子のためでもあった。
道長の娘である彰子を娶るのにおかしくない位の地位を。
そう望み、努力してきたのだ。

だがその影で、昌浩は以前と変わらず夜警にも出ていた。
そしてそのたびに傷ついて帰ってくる。
昌浩の母、露樹に悟られないように、こそこそと手当てをする昌浩を手伝ってきたのだ。
だから誰よりも、昌浩の大変さを知っている。
彼の妻になった今もその事実は変わらない。

「何で陰陽師なの？」
そんな言葉がつい口をついて出てくる。
「――彰子は陰陽師の俺は嫌い？」
彰子の独り言に呼応するように問いかけ、自分のあごを優しくなでている彰子の手を捕らえる。
「ごめんなさい。起こしちゃった？」
「ううん。それより彰子は陰陽師の俺は嫌いなの？」
「――だって、心配なんだもの。いつも昌浩が怪我をして帰ってくるでしょ？」
「うん。」
「すごく大切な人が傷つくのって悲しいわ。」
「うん。ごめん。」
「謝らないで。――昌浩が悪いわけじゃないもの。」
「でもごめん。俺謝るしか出来ないからさ。」
大切な人たちと数多くの約束をした。そしてそれを叶える為に陰陽師になったのだ。どれだけ大切な彰子の願いであったとしても、それをたがえることなど自分には出来ないのだ。
「ううん。本当は分かってるの。私がわがまま言っているの。――でもね、ひとつだけ約束してほしいの。それを守ってくれるなら、昌浩が陰陽師であっても大丈夫だから。――無理は言わないから。」
「何？」

そうやさしく問いかける。
「あのね、――――ちゃんと無事で帰ってきて。」
「彰子・・・・。」
「お願い、約束して。そうすれば私はいつもおとなしく待っていられるから。」
「分かった。約束する。」
昌浩はそう呟くと、彰子の唇にそっと自分のそれを重ねた。

来年

ぱたぱたぱた・・・・。
昌浩の帰宅を心待ちにしていた彰子の心の中を映すように軽快な音が昌浩の耳朶を打つ。その音の半ば導かれるように顔を上げた昌浩の視線の先に、満面の笑みを称えた彰子の姿がある。
「おかえりなさい、昌浩。」
そんな彰子の様子に昌浩の方も破顔して応える。
「ただいま、彰子。」
今までだって何度も繰り返されてきたであろうその言葉は、毎回昌浩の心の中を暖かくした。

「彰子、あのさ・・・。」
場所を昌浩の室に移した二人は、屏風もなにもないこの部屋で当然のように向かい合って座っていた。
「え？なぁに？」
この二人がこういう風に会話をしだすと、周りに誰がいようとそれが二人の視界に入ることはない。たとえ、昌浩の祖父晴明をもってしても不可能であろう。
そうと悟っている物の怪は早々に部屋の隅へと退散する。
「あのさ。―――手、出して？」
そう言って着物の袂に入れていたモノを取り出してそっと彰子の手のひらに置いた。
「こ、これ・・・。」
彰子の手のひらに載せられたソレは、竹を基として作られた「檜扇」だ。
「あ、あんまりいい物じゃないけど・・・。ホ、ホラ。今日俺たち

が出会って丁度一年だし・・・。その記念にと思ってさ・・・。」
「ありがとう。――――嬉しい、本当に。」
彰子の顔が驚きから喜びへと変化する。その様を昌浩は正面から捕らえる。
嬉しかった。
こんな風に彰子が喜んでくれるものを贈ることが出来た自分が誇らしかった。
彰子はその檜扇を大切そうに自分の腕で抱え込んだ。
「この檜扇をくれたのも嬉しいけどそれよりも、昌浩が今日を覚えててくれて嬉しい。本当にありがとう。」
その彰子の笑顔は、今まで昌浩が見てきた笑顔よりも数段輝いて見えた。
「うん。」
それしか言えなかった。
でも、それで十分だった。
「大事にする、ね・・・。」
言われなくても彰子がソレを大事にしてくれるであろう事は昌浩にも分かってはいた。それでも、そう口に出して言ってくれると余計に嬉しく感じる。
「――――あんまり、さ。贈り物なんて出来ないし、いつも彰子に心配ばっかりかけてるけど・・・。」
「うん？」
昌浩の言葉の先に何があるのか分からず、思わず返事を返す彰子に昌浩はそのまま言葉を続けた。
「それでも、――――また来年。こういう風に二人でお祝いをしよう。」
今日と言う日を。
言外に告げる昌浩の真意を感じ取って、彰子は大きく頷いた。
「うん、また来年ね？」
また来年。

そういえるのがなんとなくこそばゆくって、心が温かくなる二人だった。

＊＊＊後日談＊＊＊

「なぁ、昌浩。」
「なに？もっくん。」
禁中で相変わらず雑務に追われている昌浩に物の怪がそっと声をかけた。
「お前さ、この間彰子に檜扇を贈っただろ？」
「うん。――もっくんも一緒に市に行ったもんね。」
「あのさ～、それってどういう意味があるか知ってて贈ったんだよな？」
「意味？？」
「そ。扇ってのはな、昔から「末広」っていうじゃないか。そこから繁栄の意味を込めてだな、結婚とかの祝儀に贈ったりするんだぜ？」
当然知ってて贈ったんだよな？
そう問いかける物の怪に、昌浩はこれ以上ないくらいに見開かれた。

十二神将

「会わせたい人がいるんだ。」
そう昌浩が彰子に切り出したのは、昌浩と彰子の婚約が決まった翌朝のことだった。
「会わせたい人？」
彰子はそのまま鸚鵡返しに問いかける。
「うん。今日つれて帰ってくるから楽しみにしてて？」
そう告げて昌浩は邸を後にした。

「ねぇ、誰なんだろう…。昌浩が私に会わせたい人って？」
彰子は自室にある鏡に向かってそっと問いかけた。この鏡は彰子がまだ藤原彰子であった頃に使っていたもので、今回の婚礼のために父道長に言って持ってきてもらったものだ。
「姫さま、何か上に羽織られないと風邪を召されますわ。」
常に彰子の傍らについている天一がそっと肩に羽織らせる。
「――ありがとう。」
そう言って天一の羽織らせてくれた衣にそっと右手を乗せたまま、また黙ってしまう。
「何か心配事でも？」
昨夜。漸く父道長の承諾を得てめでたく昌浩と婚約した翌朝であるのに、彰子がこんなに沈んでいるのが解せないような天一の問いである。
「――あのね。今朝昌浩が『会わせたい人がいる』って言ったの。」
「えぇ…。」
それは天一も朱雀も知っていた。なんといっても二人は彰子の傍らについていたのである。
「それが、何か？」

「なんかね、私ずっとこの家にずっとお世話になっていてこの家とあと実家しか知らなかったのに、昌浩はこの家の外にも昌浩の世界があるんだなって思っちゃうとね。」
仕方ないのは分かってるの。
そう、言葉を続ける。
「昌浩が会わせたいって言ってるのは…。」
先ほどまで沈黙を守っていた朱雀が徐に口を開く。
「だめよ。」
「――――天貴・・。」
「これは私たちが口を挟むことじゃないわ。」
軽くたしなめる天一に、朱雀はすぐに首肯を返す。
「天貴がそういうのなら。」
そう了承した朱雀は、すぐにその言を引っ込めた。
「ね、知ってるの？」
半瞬をおかず問いかける彰子に天一は困ったような笑みを浮かべた。
「姫さま。これは私たちが口を出せることじゃないんです。昌浩さまが戻られたら、分かることですもの。」
「でも…。」
「それとも、不安でらっしゃるんですか？」
「えぇ…。だってそう言った時の昌浩の顔が忘れられないの。」
あんなやさしい顔を彰子は今まで見たことがなかった。
すごく大切な大切な人を会わせるというようなあんな優しい顔を。
「昌浩を信じていないわけじゃないの。大切にしてくれているし。
――――でもね、やっぱり不安なのよ。」
彰子にとって昌浩は他の何よりも大切な人だった。もしその昌浩に裏切られたりしたら、以前の圭子さまのようにならないという保証はないのだ。
「だって、昌浩にとっては私なんて何の価値もない、タダの厄介ごとでしょ？それなのに私と結婚してくれるだなんて…。呈よく押し付けられたんじゃないかって思ってしまうの。」

「姫さま。――そんなことをおっしゃらないでください。姫さまを誰よりも大切にしてる昌浩さまが聞いたら悲しく思われますわ。」
「えぇ。――でも・・・。」
それ以上、言葉を募ろうとする彰子の耳に、昌浩が帰宅してきた音が聞こえてくる。
「あ・・。」
「姫さま。昌浩さまが帰ってらしたようですわ。」
「それに一緒に来たようだ。」
天一の言葉に朱雀の声が重なった。
「え？」
「とりあえず、行ってらっしゃいまし？」
にこにこと彰子の背中をそっと押す。
彰子は二人の言葉に半ば押されるように、昌浩の元へ向かった。

「ただいま、彰子。」
「お帰りなさい。」
嬉しそうに微笑む昌浩の様子はいつもと変わらず嬉しそうだ。その傍らには、金色の双眸に優しい光をたたえた、明らかに人外と思える人物が立っている。
「ずっと紹介したかったんだ。十二神将の一人、紅蓮。」
――ずっと、紹介したかったんだ。
そう感慨深そうに呟いた昌浩の声がひどく耳に残った。

安倍晴明

「あの安倍晴明の孫」
そのセリフを幾度聞いただろう。
昌浩は一年前、そういわれるたびに表面は笑顔で右手に握りこぶしを作ったものだ。

――――晴明様が、――――命の刻限が近い、とのことです。
出雲から久しぶりに帰郷し例の僧と対決した昌浩を迎えたのは、天一のそんな言葉だった。
まだ早すぎる。まだ、何も出来ていないのだ。
そんな悲痛な想いが昌浩の心の中を駆け巡った、――――そして今夜も眠れずに夜明けを迎えるのだった。

「昌浩、起きてる？」
早朝。物忌みのため出仕を控えている昌浩を、いつものようにお越しに来たのは長い髪が印象的な彰子だった。
藤原彰子。
やんごとなき事情のために入内が出来なくなり、この安倍家へとやってきた某大貴族の長女である。
「あ、うん。」
彰子に心配をかけたくない昌浩はいつものように返事を返して、寝所を出る。昌浩の心情が手に取るように分かるもっくんはため息をついていそいそと二人の後を追った。
「ねぇ、大丈夫？」
朝餉の後。
昌浩の部屋に入るなり、彰子がそう尋ねた。
「え？」

何が？と言わんばかりの昌浩に彰子がずいっと顔を近づける。
「大丈夫？」
同じ言葉を問いかけた。
「大丈夫だよ。」
そう返事を返す昌浩の顔を彰子が両手で挟んでみせる。
「嘘。だってしんどそうな顔をしてるもん。」
「大丈夫。」
昌浩がもう一度同じセリフを繰り返す。
「何かあったんでしょ？私にまでそんな平気そうな顔を見せないで！！」
細い肩を怒らせて、彰子はそう言い放った。
本当に怒っているときに時折見せる仕草だ。
「彰子…。」
戸惑ったような昌浩の顔を彰子は自分の胸元へとそっと抱きしめた。
「あのね、多分私が知らないこと、私が知らない方がいいことが一杯あるんだと思うの。それは昌浩の仕事柄とかで仕方ないって分かってるのよ。だから何もかも話してとは言ってあげられないけど、でも、つらい時に無理して笑わなくてもいいのよ？」
昌浩はその言葉を彰子の胸の鼓動とともに聞いた。
母も、そして父もきっと知らない祖父の命の刻限。
その事実を抱えるには昌浩一人では重すぎた。
（甘えても、いいのだろうか？）
彰子には何も伝えはしないけど、彼女の横で彼女の傍で彼女の心に癒されてもいいのだろうか？
理性以外の何かがそれを是と応える。
「――――彰子。お願いがあるんだけど…。」
どれだけの時がたったのであろうか。昌浩が漸く彰子の胸からそっと顔を上げた。
「え？」
「あのさ、ちょっとの間肩を貸してよ？」

一瞬、彰子が目を見開いたのとその肩に昌浩の頭が乗るのが同時だった。

数日振りの安眠へと昌浩は誘われていった。

そんな二人の様子を物の怪は少し離れたところで見守っていた。

―了―

調伏　1

ぼく、あべのまさあき、４さい。
きょうはちちうえといっしょに「ちょうぶく」というやつにいってきます。

「お呼びですか？父上。」
大内裏より帰邸した昌浩を待っていたのは、今や陰陽頭にまで上りつめた父吉昌だった。
「あぁ。――――まぁ、こちらに入って座りなさい。」
そう言って手招きをする吉昌の薦めに従い、昌浩は吉昌の真向かいに腰を下ろした。そして当然のように、その横には物の怪の姿もある。
「実はな、お前に話があるんだ。」
そう言ってやや声を小さくする吉昌に、少しいぶかしげな視線を向ける。
「どうかしたんですか？父上？？」
少し周りを気にした様子の吉昌に釈然としないものを感じてそう尋ねた。
「いや、実はな・・・。」
――――とある大貴族の北の方が床についてしまった。奥方様を悩ますモノを取り除いて来い。
というのだ。
「それならわざわざ、家で言わなくても・・・。」
陰陽寮でもいいのでは？と言いかける昌浩を制し、吉昌はもう一度

言葉をつむぐ。
「とある方の奥方様を悩ますモノを取り除いて来るんだ。――昌明を連れて、な。」
それ以上は言えない。
そして、何よりも陰陽寮でなど話せない。
それが全ての答えだった。

「――昌明も一緒に、ですか？」
そう問いかける昌浩に吉昌はただ、頷くだけだ。
具体的にはそれ以上伝えなかった。
だが、それだけで昌浩には全てが分かった。
そして、物の怪も。
（とある奥方様の御心を慰めることが出来るのは、多分昌浩ではなく・・・。）
それは吉昌も昌浩も、そして物の怪も同じ思いだ。
だからこそ、他の陰陽師ではなく昌浩に直々にお声がかかったのだ。
「わかりました。余り時間もないことですし、今からお伺いしてまいります。」
昌浩が立ち、物の怪が後を追う。
そのいつもの光景を眺めつつ、とある奥方様の心のうちに思いを馳せる。
（――これで少しでも心をお慰めできるといいのだが・・・。）
そう、思わずにはいられなかった。
同じ子を持つ親としては・・・。

昌浩が部屋に帰り、彰子に昌明とともに向かう邸の名を告げたのはそれからすぐのことだ。
彰子はその言葉にしばし目を見開いた。
「昌浩・・・。」
「大丈夫、だよ。奥方様はきっと大丈夫だから。――はっきりと

言葉にしてお伝えできないかもしれないけど、彰子が元気でやってることをお伝えしてくるから。」
もう二度とはかかわらないと決めた彰子にとって、昌浩のその言葉は本当に嬉しかった。
「――うん、ありがとう。」
そう言って静かに涙を流す彰子の身体をそっと抱き寄せると、そのすぐ傍で二人の様子を不思議そうに眺めている昌明を振り返った。
「昌明。ちょっと父上と調伏に、行こうか？」
そう笑いかける昌浩に、昌明は嬉しそうに目を輝かせた。
「はい、ちちうえ。」

日が落ちないうちにと、二人はそのままとある邸へと向かうのだった。

続く

調伏　2

昌浩と昌明が例の邸に着いたのは、昼から夕方になろうかという時間だった。
黄昏時、である。

名前を告げた昌浩に、家人はそのまま奥へと通す。
昌明にとってはじめての道長邸来訪だった。

「遅くなりまして申し訳ございません。」
そう言って昌浩が御簾の向こうにいる貴人に頭を下げると、昌明もそれに倣い頭を下げた。
その様子に御簾の奥からほほえましげに笑っている気配がする。
「おぉ、そなたが昌浩の息子だな。」
そう言って出てきたのは、昌浩よりも明らかに立派な身なりの人物――道長本人だった。
「はい、はじめまして。まさあきともうします。」
そう言って精一杯しゃべる昌明に、道長の目も和む。
「まさあき、と申すのか？」
「はい。ちちうえとははうえと、ちちうえのおじいさまからおなまえをいただきました。」
道長はそのままつつと、視線を昌浩に合わせる。
「名前は昌明、と書きます。私の祖父の漢字を当てました。妻の漢字をそのまま使うには憚りがございますので・・・。」
道長と御簾の向こうにいるその貴人にはそれで十分だった。
昌浩の妻『彰子』の字が一般的には主上の正妻の字であることは十分承知しているから。

「ところで昌浩。少し今回の件で別室で話がある。少しの間、私の

妻に昌明を預けてはくれぬか？――――昌明もよいかな？」
昌明が不思議そうに二人を見比べているがすぐに大きく頷いた。
「ちちうえ、だいじょうぶです。ちゃんとまさあきがわるいやつがこないようにみはってます。」
少し頓珍漢だが、一人前に返事を返す昌明の様子に、御簾の向こうから笑い声が聞こえてきた。鈴を転がしたような声だ。
「はい、では・・・。」
昌浩は、道長の案内のまま別室へ移る。

「昌明殿、近う。」
二人が席を外したのを確認すると、御簾の中にいる道長の正妻、倫子が昌明を御簾の内側へと招きいれた。

「もっと顔を見せて下され？」
倫子は昌明を自分の手の届くところまで招きよせると、その顔に自分の手を優しくはわす。
「そなたは、よく似ておるの・・・。」
そう言って静かに涙を流す倫子に昌明は少し戸惑ったような顔をする。
「すまない。わたしはそなたの母をよく知っておるゆえ、懐かしく思ってな。」
自分の涙を着物の袂でぬぐうと、もう一度愛おしそうに微笑んだ。
「ぼ、わたしのははをごぞんじなのですか？」
「えぇ。よく知っておるぞえ。――――そなたの母君は元気にしてらっしゃいますか？」
「はい。まいにちちちうえのふくのしゅうぜんとかあと、よくおこってるよ。」
「？？」
昌明の言葉に倫子が不思議そうに首をかしげた。
まぁ、昌明の説明のうちの前半は倫子にも理解できる。それこそ、

『昔は繕い物は出来なかったのに、いつのまにか立派になって』
と母であれば、そう思うところである。
「ちなみに、おこっているというのはまたどうしてかえ？」
そう聞いてしまうのが、母の常であろう。
「まさあき、べんきょうしなさいっておこるんだよ。あとねあとね、たまにちちうえともけんかしてる。」
「喧嘩？」
「うん、よくじつにはなかよしになってるけど。」
そう言ってにこにこ笑う昌明の様子に、倫子は彰子が幸せに過ごしていることを強く感じたのだった。

それから小一時間。
昌明はそれとは知らず、彼の母方の祖母倫子と二人きりで過ごしたのだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9739s/

短編（少年陰陽師二次創作）

2011年11月14日13時26分発行